



Title	樋口一葉『われから』論：破局に至るまでの過程に着目して
Author(s)	水野, 亜紀子
Citation	語文. 2010, 95, p. 36-47
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69161
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

樋口一葉『われから』論

——破局に至るまでの過程に着目して——

水野 亜紀子

一はじめに

『われから』は明治二十九年五月『文芸俱楽部』第二卷第六編に掲載された。本作は発表当時より構成の面で批判を受けている。次の引用は「三人冗語」(『めさまし草』まきの五、明治二十九年五月)である。

お美尾が上とお町が上とを、殆んど等分にかゝれたるより、力負けとも云ふものにや、話の筋は先づ作者の手よりこんがらかりはじめて、何を主とも定かならぬやうになり了りたり。これは美尾の物語が、お町の物語と「等分」に書かれることを非難する。また、時文「われから」(『青年文』第三卷第五号、明治二十九年六月)には次のようにある。

此作に一葉女史にあるまじき欠点は、二つの別々の談を一つに合したるが如き——悪く形容せば所謂木を竹に接ぎたるの——觀あることこれなり。恭助夫婦と書生千葉とに關しての談一

ツ、恭助の妻の父母なる与四郎お美尾夫婦についての談一ツ、此二つの談の間には唯恭助の妻が与四郎の娘なりしといふ他に何の関係ありや。

ここには、美尾の物語とお町の物語との間に、緊密なつながりを見出せないことが指摘されている。

出原隆俊氏は、本作に鷗外訳の『埋木』の入り組んだ構造が取り込まれていることを指摘し、母の物語と娘の物語の二つが生じることになった事情を明らかにする。⁽¹⁾近年では本作が二つの物語から成ることの意味を汲み取る論考が数多く提出されている。語りの戦略を考察したものなど、その切り口は様々である。

本稿でも、美尾の物語とお町の物語が、両々相俟つて表現するものを掬い取ることを試みる。特に、美尾とお町に着目し、それが結婚生活の中で満たされない思いや不安を抱く際に見せた態度が如何なるものであったかを捉え直すことで、作品全体を読み直す。さらに、その結果を踏まえて、一葉作品における『われ

から』の位置について考える。

二 失踪に至るまでの美尾

美尾の物語は「相添ひてより五年目の春」(三)に美尾が無断外泊をした日のことから始まる。この日の出来事が具体的に提示され、それが何かしらの意味を持つことがほのめかされた後、三章以降は、美尾が与四郎に「秘密」を持たざるを得ないようないを抱くことになった経緯が、時間を遡って語られていく。

この物語を検討するに先立ち、まず問題点を整理したい。先行研究では、出奔をめぐる美尾の心理が作中で明らかにされないことが指摘される。これについて大井田義彰氏は、「お美尾の眞実は永遠に『謎』として放置されるのである。その意味では、彼女は日本の近代文学が生み出した、最も早い時期の『ファム・ファタル』のひとりであったのかもしれない」と論じる。

また、美尾が夫と我が子を捨てて失踪することから、彼女の「暗い情念」を読み取る重松恵子氏の論考がある。置手紙にある「美尾は死にたる物に御座候」(七)の言葉にも、内に秘められた「暗い情念」を想像することができるかもしれない。しかし、失踪までの過程を本文に即して検討していくと、美尾をめぐって、また別の読みを提示することができるのではないかと考える。そこで、本節では出奔に至るまでの美尾を改めて把握し直すことで、『われから』における美尾の物語の意味を考察したい。

「はかなき夢」(四)と語り手の述べるのに美尾が心を狂わせ

る過程は、読み手に理解しやすいといえるだろう。なぜなら、語り手が美尾の様子を、ときに与四郎の視点と重なるような形で伝える箇所や、美尾の感情を端的に説明する箇所からは、彼女の心情を知ることができ、ひいては、足ることを知るといった心境から変化を知ることができるからである。

四章に「身分は高からずとも誠ある良人の情心うれしく」とあることから、美尾が結婚当初には生活に満足していたことがわかる。美貌に見合うだけの高価な装いへの願望が、花見の折に決定的なものになることは、以下の箇所からわかるだろう。この日、出かけるときに美尾は「比ぶる物なき時は嬉しくて立出ぬ」(四)といった心持であった。華族の一行に出くわしたときの姿は「美尾はいかに感じてか、茫然と立ちて眺め入りし風情、うすら淋しき様に物おもはしげにて（中略）我れと我が身を打ながめ唯悄然としてあるに」(四)などと伝えられる。このときの心情は「美尾がいふまゝ優しう同意して呉れる嬉しさも、此折何とも思はれず」(四)「機嫌を取られるほど物がなしく」(四)と説明される通りである。この日以降についても、美尾の様子は「人目無ければ涙に袖をおし浸し、誰れを恋ふると無けれども大空に物の思はれて」(四)「さながら恋に心をうばゝれて空虚に成し人の如く」(五)などと伝えられる。与四郎が美尾の様子をそのように捉えるのである。美尾に欲望が兆していることが、それらの箇所からわかるだろう。

ところが、「相添ひてより五年目の春」の出来事よりも後を語

る箇所になると、美尾の態度がどのような思いから出るのか説明されないこともあり、その内面は掴みにくくなる。この語りはどのような効果をあげるのだろうか。関礼子氏は、語り手の「思われぶりな身ぶり」が「読者であるわれわれじしんの物語化を促す」と述べる。これは美尾の物語における語りの特徴を的確にいあらわしているといえよう。しかし、例えば「はかなき夢」に心を狂わせてからの美尾をめぐる表現を、関氏の述べるよう、「意味深長なことばがつぎつぎに提示されてゆく」と受け止めるにとどまらず、それが美尾の心の状態について、積極的に何か表現しているのだと捉えることで見えてくるものはないか。そこで、問題として取り上げる「相添ひてより五年目の春」以降の美尾の様子を具体的に検討してみたい。その前提として、結婚生活に対する美尾の姿勢が如何なるものであったかを、まずは整理する。

夫婦で花見に出掛けてからというもの、美尾は「其頃より美尾が様子の兎に角に怪しく」（五）「何うでも日々を義務ばかりに送りて」（五）と与四郎が見るように、時の過ぎゆく中で物思いの状態をしばらく続けている。心の内に抱いた欲望を思い切ることができないが、進んで現在の生活を放棄することもない。それでも現状に満足しないことから、ぼんやりと日々を過ごしている。

生活の豊かさを望む美尾は、この期間に与四郎に対して、これまで以上の働きをするよう懇願している。しかし、与四郎は美尾の訴えを聞き入れようとせず、さらには怒りをもって彼女の要求をはね除ける。美尾の望みが叶わないものであることは、その

やりとりから明白であろう。ただ、そのような状況下で、美尾に与四郎と別れるつもりがないこともまた確かである。それは二箇所にわたり、夫婦喧嘩の後の仲直りの場面が挿入されているところに読み取れる。一つは、物思いにふける美尾が与四郎に「生返事」（四）をし、彼が怒ると「腹たゞしく」（四）感じ、「威丈高」（四）に対応したときのことである。もう一つは生活をめぐり口論になつたときのことである。

・貴郎は私をいぢめ出さうと為さるので御座んすか、私が身はそもそもから貴郎に上げた物なれば（中略）さあ何となりして下されと泣いて、袖に取すがりて身を悶ゆるに、もとより憎くは有らぬ妻の事、離別などゝは時の威嚇のみなれば、縋りて泣くを好い機会に、我まゝ者奴の言ひじらけ、心安きまゝの駄々と免して可愛さは猶頃に増るべし。（四）

・さりとも憎くからぬ夫婦は折ふしの仕こなし忘れがたく、貴郎斯うなされ、彼あなされと言へば、お美尾お美尾と目の中へも入れたき思ひ、近処合壁つゝき合ひて物争ひに口を利く者は無かりし。（五）

喧嘩をしても、そしてその喧嘩が美尾にとつては重大な意味を持つ、暮らし向きに関わることに端を発する諍いであつたとしても、それらは決して破局には結び付かない。これは、現状が何も変わらなかつたとしても、美尾が与四郎との生活を見限ろうとはしないことを示唆する。

では次に、「相添ひてより五年目の春」の事件以後の美尾が、

どのように語られるか見ていきたい。引用は、美尾が懷妊した頃の様子である。

お美尾は兎角に物おもひ静まりて、深くは良人を諫めもせず、うつ／＼と口を送つて実家への足いとゞしう近く、帰れば襟に腮を埋めてしのびやかに吐息をつく、(五) 与四郎の働きに変化がない中、美尾の物思いは静まり、夫婦喧嘩はなくなつたという。「うつ／＼」と過ごし「吐息をつく」といった態度で過ごしている。

ところで、このあたりから美尾は母親とのつながりを強めてい る。引用中にある「実家への足いとゞしう近く」という美尾の動きは、その一節だけ見れば能動的に見えるが、この実家通いや、かつての無断外泊は、母親の働きかけによるものであることがほのめかされる。母親が美尾を思い通りにしようとする点に留意しつつ、先を見たい。さらに月日が経つと、お町が生まれる。子の誕生は、美尾夫妻にとって、それだけで一つの節目となる。しかし、その翌年の春が次のように語られるに着目する。

お美尾は日々に安からぬ面もち、折には涕にくるゝ事もある

(七)

美尾はお町を産んだ後も心を取り直すことがないのである。この折、美尾の母親は京都へいくことを宣言している。

与四郎に変化がない限り、美尾は生活に不足を感じたままであらう。美尾にとって、母親の口出しや介入は、暮らし向きを変え

るという意味において良い機会となるはずであった。しかし、美尾はそれでも自分の心を納得させることができない様子を見せる。さらに、その状態は、お町の誕生した後も続く。子が生まれることによって心境に何らかの変化があつた可能性はあるが、「日々に安からぬ面もち」でいることは見過せない。美尾が鬱々姿は、二年近くもの期間で折々語られるのである。

美尾は抱え込んでしまった思いに折り合いをつけることができず、周囲の状況が少しずつ変わる中、どの時点においても心を納得させることができない。それが彼女の表情や素振りにあらわれる様子が語られるこの意味を、本稿では汲み取りたい。作中には、美尾が満たされない思いを抱く過程が示されるとともに、どうにもならない現実が示されている。さらには失踪という結末も示されているが、その間における美尾のはつきりとしない態度にもまた、大きな意味が与えられているのではないだろうか。いま一步進めていえば、美尾のこうした逡巡の姿を描くところにこそ、この物語の主眼があると考えられる。ここまで美尾の物語を見てきたが、次節ではお町の物語を検討したい。

三 家庭の婦人としてのお町

まずは、お町がどのような人物として設定されるか確認することから始めたい。「年を言はゞ二十六、遅れ咲の梢にしばむ頃なれど、扮装のよきと天然の美くしきと二つ合せて五つほどは若う見られぬる徳の性」(三) とあるように、お町は美人で歳のわり

に若く見えるという。「朝飯前の一風呂」(三) や「濃い化粧」

(三) を施す習慣を身に付け、装いも派手である。峯村至津子氏は、先の点に加え、お町の使用人との関係、夫への態度、そして千葉への関わり方に着目して、彼女が「女性としても、家庭の主婦・女主人としても、夫の妻としても、当時の社会が求めていた理想的なあり方を、悉く裏切っていく存在」であることを指摘する。加えて、お町が家庭の婦人として至らないことも指摘できよう。次のように、語り手はお町を痛烈に批判する。

（三）
いまだに娘の心が失せで、金歯入れたる「元に何う為い、彼う為い、子細らしく数多の奴婢をも使へども、旦那さま進めで十軒店に人形を買ひに行くなど、一家の妻のやうには無く、

語り手は傍線部の批評に加え、お町が女主人としてあれこれ指示を出す様子を「子細らしく」と述べることで、自身は家政を切り回しているつもりでも、それがうわべだけのものとなっていることを揶揄する。これは、意地悪な語り方であるが、虚偽を述べるわけではない。本文を丁寧に見ていくと、語り手の批判的な姿勢を割り引いても、お町が主婦としての仕事をうまくこなせていないことがわかる。主婦の仕事の一つとして家内における火の管理が挙げられるが、本作には火の元や火鉢の扱いに関する描写がいくつか見られるので、これを例にとりたい。次の引用は、恭助の誕生日の宴会が終わった後の、お町の姿を伝えるものである。

奥さま火のもとの用心をと言ひ渡し、誰れも彼れも寐よと仰

しやつて、同じう寐間へは入給へど、（九）

お町は奉公人に指図をして、自室に戻っている。この振舞いが何を意味するか、『奥様重宝記 百拾参夫人の御答』(報知新聞社、明治四十三年七月⁽⁸⁾)を参考して考えたい。これは著名人の妻たちにとったアンケートをまとめたもので、生活のあらゆる場面において、どのような対応をするかといった質問と、それに対する回答を掲載する。「序」に「新たに家庭を作る方々には莫大の見方となり、更に家庭の改良を願つてゐる御婦人方には、多大の参考ともなりませう」とあることから、この企画には主婦の行動模式の見本を示すねらいがあることがわかるだろう。「火の用心と戸締りはどうなさるか」という問い合わせへの回答には、例えば「火の元は雇人のみに任せず、主婦の注意を要す（相馬晴草）」「下婢の役目としあれども下婢共就櫛後自分で一度見廻る事とす（井深花子）」など、火の元を自ら確認するという内容のものが目立つ。ここから、当時の上・中流家庭の主婦に求められた理想的の振舞いと、先のお町の対応がずれていることがわかるだろう。また、『女性雑誌』の「火鉢煙草盆の事」(第四三七号、明治三十年三月)には次のようにある。

火鉢煙草盆は平日よく掃除をすることを下女に教へねばなりません。（中略）火鉢の灰はすくなからぬ様、又多くあるも宜しからず、よく注意せねばなりません。夫も下女計りに任せては、物事龜末になり升から、自から手を下し、よく下女に教へねばなりません。

これを参照すると、お町の振舞いが『女学雑誌』の奨励するものからも外れていることがわかる。次の箇所を見たい。

奥方は火鉢を引寄せて、火の氣のありやと試みるに、宵に小間使ひが埋け参らせたる、桜炭の半は灰に成りて、よくも起さで埋けつるは黒きまゝにて冷えしもあり、（一）

「よくも起さで埋けつる」とあるように、「小間使ひ」によつて炭がぞんざいに扱われた結果、火鉢が役目を果たしていない。これは、お町の目配りもまた、ぞんざいであることを物語る。さらに、火鉢の扱いに関する別の記述からは、お町の所作の未熟さをも読み取ることができよう。夜更けにお町が千葉の部屋を訪ねる場面には、お町が強引に炭つぎをするところがある。次の引用はそのときの様子である。

自慢も交じる親切に螢火大事さうに挟み上げて、積み立てし炭の上にのせ、四辺の新聞みつ四つに折りて、隅の方よりそよ／＼と煽ぐに、いつしか是れより彼れに移りて、ぱちぱちと言ふ音いさましく、青き火ひら／＼と燃へて火鉢の縁のやゝ熱うなれば、奥さまは何のやうな働きをでも遊したかのやうに、千葉もお翳りと少し押やりて、（二）

お町の炭つぎのやり方は決して手馴れたものではない。お町の举止を描写するこの記述は、お町がきちんとした躾を受けたかどうかを疑わせるに十分なものとなっている。「奥さまは何のやうな働きをでも遊したかのやうに」と添えられる言葉は、お町が得意氣であることへの皮肉となつており、さらには所作を身に付けて

いないことに対する彼女の無自覚を浮き彫りにする。

『われから』より少し遅れて発表された、北田薄水『細君二幅対』（『大和心』二号、明治二十九年九月）は「善」の章と「悪」の章から成り、「善」には良妻としての、「悪」には悪妻としての女性像が極端な形で作り上げられている。お町が「悪」の章に登場する妻と多くの点で重なりを見せるることは興味深い。以下は『細君二幅対』「悪」の章からの引用である。

・妻は又此上もなき放縱の人附悪しき女。我が生家の財産家なるを笠に着て、さりとて人もなげなる振舞の憎さ。
・我身は多勢の上に立つ高官なれば、慰労の会或は新年宴会など、欠席の出来ぬ身柄の是非なし。されど我は其方といふ妻のあれば、決して／＼他し女に迷ひて夜を更かすなど、さる事は努々為まじければ、其義は心に懸けて呉れぬやうにと、それとなく異見を聞かし給へど、奥様は露程も肯入るゝ氣色なく、女の三十路を越えしよき年しながら、娘小供のやうにすねたり怒つたり、
・性来は機嫌かひとやらいふ方なれば、御機嫌よき時は又無上なる御機嫌にて、下女書生を対手に面白き話など打出して、余所眼も恥ぢず笑ひ転けもし戯も為給へど、
・さる程に、上を学ぶ下の何条規律正しかるべき。いつとはなしに自堕落になりて家内は乱れ勝に、
・奥様は乱行日にく募り行きて、流行を逐うての召物の新調やら、物見遊山の入費などに、いつしか俸給の半ば消えて仕舞

ぬ。

財産家の家付き娘という設定のもと、付き合いの多い夫にひどく憤慨すること、機嫌買ひであること、奉公人の使い方に問題があること、着飾ることや娯楽を好き放題楽しむことなどが、両者似通う。ここから、お町の造形は当代の悪妻のイメージと重なることがわかる。

お町は決して性悪な人物ではない。しかし、家庭の婦人として行き届かず、悪妻と受け取られかねないような振舞いをする人物であるといえる。もっとも、本作を読み解くうえでは、そこに、結婚によって〈娘〉から既婚者となることへの自覚の問題が絡んでいることの意味を考えなければならないだろう。お町は恭助との結婚を「嬉しき縁」(九)と発言している。家族から愛情を受けた記憶がないお町にとって、結婚は、家族ができるところにこそ意味があった。それゆえ、恭助との結婚を嫌がることなく受け入れたようである。ただ、彼女には結婚という画期への意識が薄い。お町は法の上では妻となっていながらも、まるで〈娘〉のままであるかのような意識であり続けているのである。そのことが至らない主婦としての姿と直接にも間接にも結び付いている。

いったい、お町は結婚生活をそれ以前からの延長として感じる

ことを許された境遇にある。家付き娘である彼女は、「舅姑おはしまして万づ窮屈に堅くるしき嫁御寮の身と異なり、見たしと思はゞ替り日毎の芝居行きも誰れかは苦情を申べき」(八)とある

ように、遊ぶも散財するも自由である。与四郎の財産を相続して

政治活動を行なう恭助も、お町に対し苦情を述べることがない。大掃除を終えた「十六日の朝ぼらけ」(十一)における夫婦の会話の場面には、お町に對して家庭的な役割を望まない恭助のスタンスが顕著にあらわれている。家の安定や繁榮を願う恭助は、頃合を見計らって養子を貰うことを提案するが、彼は常から気にかけたその問題を持ち出す際に、鬱々として過ごすお町への配慮を怠れない。「これは急がぬ事として、ちと寄席きゝにでも行つたら何うか」(十二)と、家の問題と同じほどの重みを持たせて、お町への気遣いを述べている。

お町は〈娘〉の頃と変わらぬ意識で過ごすことを許された境遇にあり、長らくその境遇を受け入れてきた。先述の通り、それが至らない主婦としての姿と結び付く。さらに、恭助を心から頼みにする姿とも結び付いている。お町は恭助のことを「兄とも親とも」(八)思うというが、その思いが高じて彼への縋り方は並一通りではない。彼を頼む気持が強過ぎることから、やがては苦しむことにもなる。

結果的に家庭内でのお町の立場を危うくしたのは、日頃から奉公人に対して恣意的で不用意な対応をし、千葉にとりわけ目をかける姿が人目にどのようにうつるか考えていなかつた、お町自身であった。お町と千葉の醜聞は、お町が本結城を千葉に遣つたことで「恨み」(十三)の感情を持った中働きの福によつて故意に立てられる。

以上のように、お町が〈娘〉のままであるかのような意識から

脱却していないことは、本作の核心に関わる設定であるといえよう。ここまで考察を踏まえて、次節ではお町の内面に初めて迫られる、九章を検討したい。

四 不安の描出

本作では、冒頭よりお町が物質的に恵まれた生活を送り、欲求を最優先させる姿が語られていく。これに対し、九章では彼女の内面的な問題がクローズアップされることで、物語は転換点を迎える。この場面が重要であることは間違いないが、お町にとつてどのような意味を持つのか、本節で改めて論じたい。

宴会の催された夜、お町は中座して一人庭へ出ることで、図らずも自身を見つめることになった。座敷の騒ぎを遠くに聞くことによって、お町は日頃から「兄とも親とも」慕つて頼りにしている恭助の存在を、距離を置いて眺めることになる。

木の間もれ来る坐敷の騒ぎを遙かに聞いて、あゝあの声は旦那様、三味線は小梅さうな、いつの間に彼のやうな意気な洒落ものに成り給ひし、由断のならぬと思ふと共に、心細き事堪えがたう成りて、締つけられるやうな苦るしさは、胸の中の何処とも無く湧き出ぬ。（九）

お町は恭助が付き合いに長けてきたことを感じ取ると、「心細」さや「締つけられるやうな苦るしさ」を感じる。このときの感情を、後に、恭助から「倦かれ」（九）る不安といいあらわしているが、より正確にいえば、お町は恭助を頼るのを常としてきた己

をここで初めて顧みて不安を感じたのである。というのも、お町は恭助の世間が広くなりつつあることや、彼が変わりつつあることを、この九章の場面で初めて発見したのではない。冒頭において既に、お町が恭助の変化を感じ取っていることが示されているのである。恭助の変化に対するお町の受け止め方にこそ違いがあり、そこに留意すべきである。一章に「奥方はいかにするとも睡る事の無くて幾度の寝がへり少しは肝の氣味にもなれば」とあるように、お町は帰りの遅い恭助に苛立ちを覚えている。恭助が器量を上げることをお町が気にかけているのは、次の記述に明らかである。

昔は彼のやうに口先の方ならで、今日は何処开処で共者をあげて、此様な不思議な踊を見て来たのと、お腹のよれるやうな可笑しき事をば眞面目に成りて仰しやりし物なれども、今日此頃のお人の悪るさ、憎くいほどお利口な事ばかりお言ひ遊して、私のやうな世間見すをば手の平で揉んで丸めて、夫れは夫れは押へ処の無いお方、まあ今宵は何処へお泊りにて、明日はどのやうな嘘いふてお帰り遊ばすか、（一）

かつての恭助は外での出来事についてお町にも聞かせ、面白い話は二人で一緒になつて笑っていたという。付き合いを優先させ、一人で楽しむようになった現在の恭助を、お町は昔と対比させながら嘆いている。留意したいのは、お町が恭助の交際に関する立つとき、恭助を責めることで気を晴らしてきたことである。

旦那様が去歳の今頃は紅葉館にひたと通ひつめて、御自分は

かくし給へども、他所行着のお供より縫とりべりの手巾を見つけ出した時の憎々さ、散々といぢめていちめて、困め抜いて、最う是れからは決して行かぬ（中略）堪忍せよと謝罪してお出遊したる時の氣味のよさとては、月頃の痞へが下りて、胸のすくほど嬉しう思ひしに、（一）

恭助が如才なく振舞うことに不満を感じるお町は、恭助を責め、非を認めさせることで気を落ち着かせる。さらに注目したいのは、お町が苛立ちを感じる対象が、恭助本人のみならず、周囲にも及ぶことである。

・水曜会のお人達や、俱楽部のお仲間にいたづらな御方の多ければ夫れに引かれて自づと身持の悪う成り給ふ、（一）

・旦那様ばかり悪いのでは無うて、暑寒のお遣いものなど、憎くらしの処置をして見せるに、お心がつひ浮かれて、自づと足をも向け給ふ、本に商売人とて憎くらしい物（一）

以上の箇所からわかるように、お町は恭助の交際が広くなり、彼の目が自分に向けられなくなると、恭助や他人を非難していた。

しかし、九章では、恭助の器量が増したと感じたときのお町の受け止め方が、これまでと大きく変わる。恭助がいない状況に耐えることができない自分自身に目が向けられるのである。その結果、お町は、恭助を頼ることを当然と思い、それに対して平氣でいた己に、初めて心を乱す。九章は、恭助とともに過ごせないときの苛立ちが、自身の問題として受け取られたという意味で、重要な場面となっているのである。

我れと我が身に持て脳みて奥さま不覚に打まどひぬ、此明く
れの空の色は、晴れたる時も曇れる如く、日の色身にしみて
怪しき思ひあり、時雨ふる夜の風の音は人來て扉をたゞくに
似て、淋しきまゝに琴取出し独り好みの曲を奏でるに、我れ
と我が調哀れに成りて、いかにするとも弾くに得堪えず、涙
ふりこぼして押やりぬ。ある時は婦女どもに凝る肩をたゞか
せて、心うかれる様な恋のはなしなどさせて聞くに、人は腮

これに閑わり、その後の展開の中で着目したい点が二つある。一つは、まず何よりも先に、恭助への哀訴がお町の解決に繋がらないことが示される点である。先述の通り、恭助はお町との仲を表面的にうまく保とうとしているため、お町が「面持の唯ならぬ」（九）様子を見せると「何故寐ぬか、何を考へて居るぞ」（九）とすぐに問い合わせ、お町は言葉で説明することのできない「怪しき心」（九）を一応は説明する。しかし、この訴えは意味を成さない。お町の不安は、本質的にはお町自身の内面に関わる問題であり、恭助の対応いかんにどうにかなるものではないからである。もともと、恭助はお町の話に真剣に取り合っていない。「お前の思ふて呉れるほど世間は我しを思ふて呉れぬから、まあ安心して居るが宜い」（九）など言葉をかけるが、恭助はお町の訴えを悟氣と取っている。

もう一つは、恭助へ憂慮を述べることがお町にとつて何の解決にもならないことが示された直後より、お町の思い悩んだ様子が伝えられる点である。

のはづるゝ可笑しさとて笑ひ転げる様な埒のなきさへ、身には一々哀れにて、我れも思ひの燃ゆるに似たり、（十）
これ以降、お町は半月あまり鬱ぐことになる。「怪しき心」を抱いたお町は、鬱いだ気持をどうすることもできない。さらに、恭助から養子の話を持ちかけられると、「さもなく物をおもひ給へば、奥様時々お瘤の起る癖つきて」（十三）とあるように、体に異変を来すようになる。お町は使用人たちの会話から恭助の妾の存在を知り、さらには家の問題を重く受け止めていなかつた自分の浅慮に思い当たる。恭助はかねてから家の跡継ぎの心配をしていたが、お町はそのことに耳を貸していなかつた。千葉との会話の中で「別けでお前は一粒物（中略）千葉家を負ふて立つ大黒柱に異状が有つては立直しが出来ぬ」（二）と忠告するお町は、跡目の大切さがわからぬわけではないが、我が身の問題としては深く考えてこなかつたのである。恭助が養子に望む子が妾との間の子ではないかと訝り、しかし「恨み」（十二）を口にすることすらできないとき、心労が瘤となつてあらわれる。以上の二点に着目すると、本作には、不安を抱いたお町がその後苦しむのみであつたという経緯が描出されていることがわかるだろう。

その後、お町は千葉との醜聞が原因で、恭助から別居をいい渡されることになるが、別居を告げられるまでの期間のことは、状況説明や恭助の苦悩が中心で、お町の心情や葛藤の内容、お町がどのようにその期間を過ごしたかといった事柄は物語の背後へと追いやられる。お町の存在自体が後景へと追いやられるこの箇所

からは、お町の心の移り変わりについて何も読み取ることができない。しかし、この件は、お町の鬱いだ姿が語られることと関わりを持ちながら、本作の最後の場面におけるお町の科白が意味するものを、大きく引き立たせているといえるだろう。以下、最後の場面を引用しながら、そのことを詳述したい。

お町は恭助から別居を告げられると、恭助に對して初めて主張らしい主張をする。

お前様どうでも左様なさるので御座んするか、私を浮世の捨て物になさりまするお氣か、私は一人もの、世には助くる人も無し、此小さき身すて給ふに仔細はあるまじ、美事すてゝ此家を君の物にし給ふお氣か、取りて見給へ、我れをば捨てゝ御覽せよ、一念が御座りまするとて、はたと白睨むを、

（十三）

この箇所は、お町の変貌や成熟の跡を示すものとして捉えられてきた⁽¹⁾。確かに、「一念が御座りまする」は、これまでには見られなかつた強い反抗の言葉である。「此家を君の物にし給ふお氣か」と述べて恭助の対応を責めるところには、これまでとの違いを認めることができよう。ただ、先の言葉に、家付き娘としての立場で恭助に接していくとお町の態度があらわれていることは看過できない。お町がここで強調するのは、家付きという、自分にまつわる外的な条件である。それを振りかざしたうえで「一人もの」である自分を見捨てる慘さを訴える。家付き娘であるがゆえに「娘」のままであるかのような態度で結婚生活を過ごしてき

たお町は、ここでもその立場を前面に押し出すのである。その意味で、お町が以前と何ら変わりないことを露呈させたのが、この最後の場面ではなかつたか。恭助がお町の措置を悩んだ約四ヵ月の期間を挟んだ後にこうした場面が用意されることで、お町に変貌や成熟といったものが見られない事実が強調されていると見ることはできないだろうか。お町は、恭助から「今宵より其方は谷中へ移るべきぞ」（十三）と告げられると、「我に悪き事あらば何とて小言は言ひ給はぬ、出しぬけの仰せは聞きませぬ」（十三）と返答する。恭助に対し、別居をいい渡すくらいならばなぜ「小言」をいわないのかと詰るところには、お町が彼との関わりにおいてこの一連の出来事の解決を、ひいては自分の内面に関わる問題の解決を求めていたことが読み取れる。恭助を詰るお町の言葉は全て、これまで恭助に抱いてきた期待の裏返しであろう。最後の場面からは、お町に取り立てて変化のなかつたことが看取できるのである。

五 おわりに

『われから』には、美尾・お町が満たされない思いや不安を抱いたとき、それぞれ鬱々とするのみであるところが語られる。美尾は結局出奔するが、そこに至るまでの二年近くの期間を鬱いで過ごしている。美尾・お町はともに、名状し難い自分の心を治めることができない。そのように、境遇としては対照的な位置にありながら、問題を抱えた折に見せる二人の様子は似通つたもので

あることがわかる。『われから』は、美尾・お町を通して、把捉し難い心の生じる有様を表現した作品であるといえよう。そのような心が結果的に二人の身を誤らせている。

既婚女性を主人公とした一葉晩年の作品群は、『われから』を含め、いずれも女性が結婚生活の中で苦しむ状況を描出する。『軒もる月』『十三夜』『この子』など、本作に先行する作品で中心的に扱われた問題は、結婚によつてもたらされた不如意に対し、主人公たちがどのように折り合いをつけていくかということであった。『裏紫』は、お律が姦通に向かうことから、先の三作品とは全く別の関心から創作されているように見える。しかし、親や親代わりの人が定めた結婚という、受身的にもたらされる境遇の中で、それを自分の人生としていかに生きるか模索されるところには、先の三作品と共通するものが見出せるだろう。主人公が自らを苦しめる対象と向き合うところが描かれるのである。これに対して、『われから』はどうであろうか。美尾・お町が結婚生活の中で折り合いをつける対象は、夫ではなく、制度でもない。それは具体的なものではなく、自分の中に沸き起つた捉えどころのない心なのである。こうしたテーマを扱うところに、『われから』の独自性があるといえるだろう。

注

- （1）出原隆俊「『典拠』と『借用』—水揚げ・出奔・『孤児』物語—」（『論集樋口一葉』おうふう、一九九六）

- (2) 山本欣司「物語ることの悪意——「われから」を読む——」(『論集』 横口一葉IV) おうふう、二〇〇六)
- (3) 大井田義彰「罪は我が心より……「われから」試論——」(『媒』 一九八八・十二)
- (4) 重松恵子「横口一葉『われから』論——母娘の物語が指向するもの——」(『近代文学論集』一九九一・十二)
- (5) 関礼子「物語としての『われから』——「われから」(『語る女たちの時代』一葉と明治女性表現)新曜社、一九九七)。初出は『立教大学日本文学』(一九八六・十二)。
- (6) 渡辺澄子氏は「一葉文学における新たな飛躍——『われから』論」(『横口一葉を読み直す』學藝書林、一九九四)において「娘の美貌が贅沢を生む資本になることを底辺の世間に生きるこの母は知悉している」と述べる。大畑照美氏は『『われから』論——母と美尾、美尾と町子——』(『近代文学研究』二〇〇一・一)で「私の思ふやうに成らぬ事は有るまじ」という確信を持つ母にとって、娘は、自分の身の安定を得る「商品」だった」とする。
- (7) 峰村至津子「われから」論(上)『国語国文』一九九五・三)
- (8) 長友千代治編『重宝記資料集成 第四十四卷 明治以降6』(『臨川書店』一〇〇七)に掲載。
- (9) 高田知波氏は「(女戸主・一葉)と『われから』(『駒次国文』一九九三・一)において、お町が「イエ」(筆者注・「家屋と制度を中心とする「家」のハード面)はあっても「ウチ」(筆者注・「緊密な家族関係を軸にした「家」のソフト面)がないという「欠落感」の中で育ったことを指摘し、「そのことが婿養子縁組を十五前後の少女が抵抗なく受け入れることのできた内的基盤を形成していたのではないか」と述べる。
- (10) 山田有策氏はお町が「自らの倫理・論理を形成することなく成

(11) 大井田義彰氏は前掲論文において「言葉が他者との関係性の中で初めて体得しうるものだとすれば、おそらくお町は「われから」の始まる時点で、まだ「他者」とは出会っていなかった」としたうえで、「我れをば捨てゝ御覧せよ、一念が御座りまする」という言葉は、彼女が初めて「他者」に向かって発することでのきた、彼女自身の言葉であった。つまり、お町は末尾に置かれた危機で、ようやく変貌しようとしていた」と述べる。戸松泉氏は『『われから』試論——小説的 세계의 顯現——』(『国文学 解析と鑑賞』一九九五・六)で、「私は一人もの」という町子の孤独の自認は、夫を唯一の頼りとする故にその夫との心の乖離不安を抱き虚ろな日々を送っていた町子とは一線を画するものであつた」と述べる。

* 一葉作品の引用は『横口一葉全集』(筑摩書房、一九九四)に拠った。ただし漢字は適宜通行の字体に改め、箇点やルビは省いた。傍線は全て筆者の付したものである。なお、本稿は横口一葉研究会第十八回大会(二〇〇九年十一月二十三日、於東京学芸大学)での口頭発表および本学へ提出した博士論文をもとに成稿したものである。研究会ならびに審査会でご教示いただいた先生方に心より感謝申しあげます。

(みずの・あきこ 本学博士後期課程修了)